

## 幼児教育が人生を左右する

「人間の能力は幼児期に創られ、それがその後の一生を支配する」といふ事は、今は大脳生理学を初めとする“脳諸科学”の目覚ましい発達に依り明らかにされてゐることは前述しました。然るに幼児教育の世界は、依然として「幼児は幼児らしく伸び伸びと自由に遊ばせて置けば良い」といふ意見に支配されてゐて、その為に人生の最も重要な時期を無為に過してゐるのが実情です。

幼児期の教育がうまく行はれたら、後の学校教育は放って置いてもひとりでうまく行くものです。その反対にこれがうまく行かなかつたら、後の学校教育にどんなに力を入れてやった所で大した効果は得られなくなるのです。その最も基本である「品性を養ふ教育」については述べましたので、「漢字教育」を例にとって述べたいと思ひます。

前にも述べましたが、漢字教育の適時期もやはり幼児期なのです。「漢字が難しい」といふのは、幼児期にそれを学ばない事に原因があるのです。どんなに漢字指導の巧みな教師でも、6年間の漢字教育で「中学に進んだ時に各学科の教科書が読解できる生徒が半教以上ゐる」までに指導できる教師はゐないでせう。それは幼児期を過ぎると努力しても漢字を覚える事が困難になるからです。所が幼児期ですと、努

力しないでもひとりで漢字が覚えられることは既に述べた通りです。小学校の6年間に9百字の漢字が覚えられない子供でも、幼児期だったら3年間に一千字以上の漢字が楽に覚えられるのですから。

木村久一著『早教育と天才』は大正6年に初版が刊行された書物で、昭和52年に改訂版がでてゐます。7章から成る本文はカール・ヴィツェを初めとする先人の教育説・教育法の紹介です。文末に“結語”といふ、12ページに亘る木村氏の意見があり、そこで幼児教育の重要性が実に見事に述べられてゐます。

「学校教育というものは、どんなに良い教育者が、どんなに良い教育主義に従つて、どんなに良い教育法を用いてもたいした効果の現れるものではない。学校教育からたいした効果を期待するのは間違いである」「学校教育はうまくやれば、一中に入学する者を多くするぐらいのことはできよう。それ位が関の山であつて、どんなにうまくやっても、英才をつくることはできない。……しかし家庭教育はうまくやればこれができる」「人の運命は、ほとんど学齡以前の境遇と教育の如何によって定まる。子供が学齡に達して学校に入学する頃は、その運命はだいたい定まっているのである。だから学齡以前の境遇と教育の悪い子供は、教育者がどんなに骨折つてもたいした効果が現れない」

「私はこう言っても、決して学校を呪う者ではない。世には教育の大切なことを知らない人がたくさんある。またある人は知っていても自ら子供を教育しようと思わない。学校はこういう、魚のように子供を産みっ放しにする人のために必要である」

「学校は、魚のように産みっ放しの人のために必要だ」とは何と痛烈な言葉でせうか。私はかう言ひ切って<sup>はばか</sup>憚らない氏の気持が痛い程よく解ります。それ程に幼児期の教育の重要性は切実なのです。然るに、世の人の多くはそれを知らず、又知ってもそれを実行には移さないのです。それでは“魚”と全く同じでは無いですか。氏はカール・ヴィッテをよく知ってゐますし、幼児教育の重要性をよく知ってゐますから、何とかして世の人々に警鐘を鳴らして幼児教育についての無知、無関心さから救ひたかったのです。

然し、これ程見事な警告が行はれたのにも拘らず、大正時代以来今日まで教育界はこれを見逃し続けて来たのです。世の教育者といふ者は所詮これだけの者でしか無いのです。教育は、学校や教育者を当てるべきものでは無いのです。人の子の親たる者は、教育の責任は親に在ることを銘記して、とりわけ幼死期の教育に努力を傾注して欲しいものです。